

昭和五十二年六月招集

第二回館山市議定会定例会會議録第三号

館山市議會

目次

日時	一
場所	一
出席議員	一
欠席議員	一
出席説明員	一
出席事務局職員	一
議事日程	一
開議	二
報告第一号	二
報告第二号	二
報告第三号	四
議案第四十三号	六
議案第四十四号	一
議案第四十五号	二
議案第四十六号	三
議案第四十七号	五
議案第四十八号	七
議案第四十九号	七
議案第五十号	一〇
延會	二三
本日の會議に付した事件	二三

一、昭和五十二年六月十六日（木曜日）午前十時
 一、館山市役所議場

一、出席議員 三十名

一 番	吉 田 勇治郎	二 番	伊 藤 幸太郎
三 番	穴 戸 寿 夫	四 番	押 元 稔
五 番	黒 川 平 治	六 番	鈴 木 正 義
七 番	本 間 昭 二	八 番	松 下 正 己
九 番	鈴 木 稔	一〇 番	流 山 源次郎
一 番	近 藤 好 雄	一 番	栗 原 一 雄
二 番	林 豊	二 番	石 井 輝 久
三 番	辻 田 実	三 番	安 西 益 男
四 番	石 井 武 敏	四 番	渡 辺 軍治郎
五 番	渡 辺 昭 夫	五 番	和 田 一 郎
六 番	田 中 禄 郎	六 番	五十嵐 昇
七 番	菊 井 敏 博	七 番	西 村 真 次
八 番	伊 賀 多 朗	八 番	藤 田 益 治
九 番	遠 山 ヨネ子	九 番	石 井 正
一〇 番	望 月 照 正	一〇 番	山 口 康

一、欠席議員 なし

一、出席説明員

第一号に同じ

一、出席事務局職員

第一号に同じ

一、議事日程（第三号）

昭和五十二年六月十六日午前十時開議

日程第一 報告 第一号

館山市水道事業特別会計予算の継続費繰越計算書について

日程第二 報告 第二号

財団法人館山市開発公社の経営状況説明書の提出について

日程第三 報告 第三号

財団法人館山市環境保全公社の経営状況説明書の提出について

日程第四 議案 第四十三号

館山市市税条例の一部を改正する条例の専決処分の承認について

日程第五 議案 第四十四号

館山市国民健康保険税条例の一部を改正する条例の専決処分の承認について

日程第六 議案 第四十五号

昭和五十一年度館山市一般会計補正予算(第四号)の専決処分の承認について

日程第七 議案 第四十六号

館山市長、助役、収入役の給与及び旅費に関する条例の一部を改正する条例の制定について

日程第八 議案 第四十七号

非常勤の特別職の職員に係る報酬及び費用弁償に関する条例の一部を改正する条例の制定について

日程第九 議案 第四十八号

館山市教育長の諸給与及び勤務条件等に関する条例の一部を改正する条例の制定について

日程第十 議案 第四十九号

館山市学校安全共済掛金徴収条例の一部を改正する条例の制定について

日程第十一 議案 第五十号

館山市国民健康保険税条例の一部を改正する条例の制定について

日程第十二 議案 第五十一号

館山市非常勤消防団員に係る退職報償金の支給に関する条例等を廃止する条例の制定について

日程第十三 安房郡市広域市町村圏事務組合議会議員の選挙

開

議 午前十時三分開議

○議長(吉田勇治郎君)

本日の出席議員数二十七名、これより第二回市議会(定例会)第三日の会議を開会し、直ちに本日の会議を開きます。

本日の議事は、お手元に配付の日程表により行います。

この際申し上げます。本日の議事案件の内容説明はすべて終わっておりますので、直ちに質疑より行います。

議案の上程

○議長(吉田勇治郎君)

日程第一、報告第一号館山市水道事業特別会計予算の継続費繰越説明書についてを議題といたします。

報告第一号 館山市水道事業特別会計予算の継続費繰越計算書について

○議長(吉田勇治郎君)

御質疑願います。御質疑ございませんか。
― 御質疑なしと認めます。
次に進みます。

議案の上程

○議長（吉田勇治郎君） 日程第二、報告第二号財団法人館山市開発公社の経営状況説明書の提出についてを議題といたします。

報告第二号 財団法人館山市開発公社の経営状況説明書の提出について

質 疑 応 答

○議長（吉田勇治郎君） 御質疑を願います。

○一八番（渡辺軍治郎君） ニページ損益計算書の中の売上原価の問題について、受託工事原価の当期の取得高として六千六百七十四万五千六百九十一円が計上されておりますが、期末有高が上げられておりませんので、この分は売上原価に含まれると思いますが、どうなのか。

貸借対照表を見ますと、六千六百七十四万五千六百九十一円が結局売上原価として貸借対照表に載っておりますが、これは誤りではないか。

それから、三ページですが、聞き漏らしたかもしれませんが、雑収入として五十九万八千一百十円がありますが、この内容を説明していただきたい。

同じく三ページの中で貸倒引当金に九百九十七万一千九百五十五円、補修工事引当金に百万円、合計一千九百七十七万一千九百五十五円が引当金として内部保留されておりますが、純損失として一千三十四万一千八百六十二円ありますが、内部保留を見ますと、おつりがくるといいますか、欠損にはなっていないというふうに理解してよろしいかどうか。

○市長公室長（小倉澄男君） お答え申し上げます。

これは損益計算書でございますので、いわゆる売上高に対しての原価をここに計上してあるわけでございまして、この受託工事の当期の中に工事しました原価といたしまして、これは冷房工事であります、これだけの原価があるというふうなことで、売上高との損益をあらわすためのことでございます。

そして、さらにそれから雑収入の分につきましては、開発公社で地図を持ってありますが、その五千分の一の地図の売上高が十二万四千四百五十円、それから固定資産税といたしまして、これは谷藤原の土地に對しまして、一ちょっとはつきりしませんので、のちほど報告したいと思ひます。

それから、特別損失、当期純損失でございますが、貸倒引当金繰入、これは五十一年度に貸倒引当金として売掛金に対する千分の十二相当額を計上した次第でございます。

それから、住宅団地補修工事引当金といたしまして、これは規定によりまして百万円をここに繰り入れいたしました次第でございます、固定資産除却損は……以上の損失がございまして、プラス、マイナス当期といたしまして一千万円の損失となるということでございます。

○議長（吉田勇治郎君） 一八番議員さんに申し上げます。ただいま答弁保留のものがございますが、先へと……。

○一八番（渡辺軍治郎君） いまの売上原価の問題ですが、売上原価の計算は、この部分を除けば期末残と当期の取得高、これを合計したものから期末有高を引いたものが売上原価になるわけです。ほかのものはみんなそういう計算しているんです。これはいわゆる在庫をあれたもんで、土地の在庫をあれたもんで

しょう。期末残高に当期の取得高を加えて、それから残を引いたものが当期の売上原価になるわけです、そうでしょう。これは帳簿上そういうふう処理するわけです。ところが、ここには当期の取得高だけが上がっていて、残としての期末有高が上がってないとすれば、この分はその当期の売上原価に入るわけでしょう。そうするとこの分だけ赤字がふえることになるわけです。売上原価がこれだけふえるわけですから。だからこれは記載の間違ひではないかと指摘したわけです。貸借対照表の中に残として上がっているわけでしょう。これは帳簿上の間違ひではないかというふうに指摘したわけです。

○市長公室長（小倉澄男君） それでは早速調べましてお答え申し上げます。これと雑収入の……。

○一八番（渡辺軍治郎君） 受託土地売上原価の——これは例です。から、示しますが、一番最初にあるやつは八千四百七十八万六千七百七十四円と当期取得高の四千三百八十六万七千三百五十五円合計して一億二千八百六十五万四千二百二十九円から一億二千百九十九万九千五百二十六円を差し引いて七百四十五万四千六百三円とそういう計算をしているわけでしょう。

そのあとのやつは、その後の受託舗装売上原価は当期の取得高を挙げて期末有高がないから二千四百九十六万八千三百円を当期の取得高として挙げたわけでしょう。これは売上原価へ入るわけです。

こういうふうに見てくると、一番しまいのやつだけ期末有高がないから当然これは売上原価に入るべきもなんです。帳簿上そういうことになるわけです。だから誤りじゃないかと。しかも貸

借対照表の中には残高として上がっているわけですよ。

それから、私が聞いたのは、もう一つは引当金の内部保留。実際にはこれは貸倒引当金は繰り戻してまた繰り入れているわけですから、これは当然内部保留されているわけです。損金として扱ってても。だから実質的には赤字ではないということじゃないか、ということをお聞きしたわけです。

あと残っているのは、その雑収入のやつなんです。

○議長（吉田勇治郎君） 後刻に譲っていただきますか、先へ進ましていただきますと思います。

速やかに調査するように……。

他に御質疑ございませんか。——先へ進ませていただいて、あとで答弁でよろしくごさいますか。——ではそのように取り計らわせていただきます。

御質疑がなければ次に進みます。

議案の上程

○議長（吉田勇治郎君） 日程第三、報告第三号財団法人館山市環境保全公社の経営状況説明書の提出についてを議題といたします。

報告第三号 財団法人館山市環境保全公社の経営状況説明書の提出について

質疑応答

○議長（吉田勇治郎君） 御質疑を願います。

○一八番（渡辺軍治郎君） 二ページをお願いいたします。二つばかりお聞きしたいんですが……。

事業経費の中で給与費として六千四百六十九万六千四百二十円が計上されております。説明では二十二人の職員と三名分ということで報告されておりますが、これについてこの三名分の——これは臨時人夫ということではなくて、人夫に対する賃金といううなことになると思うんですが、この分が含まれておりますけれども、これはおそらく集金人の三分のことと聞いていますが、集金人は八万幾らですか、そのくらいの給料はもらっていますが、二千軒ぐらいいですか、そういうものを集金の対象にしていくんでバイクでもって歩かないと集金できないわけです。

一回で済まないで、二回も三回も行かなければ集金できないという事で、バイクとそれに要するガソリン、そういうものを自己負担しているわけですが、こういう給料でいえばあまり高い給料じゃなくて、そういう消耗的なものやバイクというようなものを全額負担しているということでは、かなり負担が重過ぎると思うんですが、これは公社のほうで、私用に使う部分もあるわけですから半分くらいの補助はできないかどうか。その点をひとつ伺います。

もう一つは、三人は職員や臨時職員と同じような身分保障がないわけです。せめて社会保険ぐらいは入れてもらえないかという要望があるわけです。そういう点はできないのかどうか、この点をひとつ伺います。

それから、損益計算書で九百三十八万四千三百二十一円の赤字になっていきます。この赤字は内部保留されているものと比較すると若干黒字になるんじゃないかと思うんですが、減価償却の分として七百五十二万四千七百二十円、それから退職給与引当金が百

八十八万六千四百円ございます。これは取りくずしが三十五万一千三百円ございますので、百五十三万五千円というのはこれは内部保留されているもんだと思うんです。それに貸倒引当金繰入額として二十八万五千六百十二円が計上されていきます。これは合計しますと九百三十四万五千四百三十二円というのが内部保留になっているわけです。

ですから、それと比較しますと、実質的には黒字とは言いませんが、大体とんとんぐらい、四万ぐらいの差がありますが、実質的に大した赤字ではないというふうに理解していいと思うんですが、どうか。その点をお聞きいたします。

貸借対照表の中でも、これは累計の赤字が計上されていきますけれども、減価償却を見ますと一千八百十五万九千八百三十七円、退職給与引当金が二百三十三万四千四百円、合計しますと二千七百九千五百四十九円、赤字が二千四百四十九万五千六百八十九円になっていきますから、これとの比較ではそう大きな赤字にはなっていないと思うんですが、そういうふうに理解してよろしいかどうか。その点をちょっとお聞きします。

〇衛生課長（石井 謙君）　まず第一点の給与費の関係でございますが、職員二十二名と、三名は事務職員でございます。集金人の数ではございません。

集金人の関係で、御質問はバイクの関係が、せめて集金人に対してバイクを半額ぐらいいもってやれないか。この集金人は現在女性で四名委託しておるわけでございまして、その中には自転車集金に行く方もあるし、バイクで行く方もあるし、まちなちなわけです。そういうような要望がある時点で私も聞いたことがあ

るわけでございますが、これは検討事項としてあるわけでございます。

それから、集金人の社会保険との身分保障関係、社会保険に加えてできないかということでございますが、あくまでも委託でございまして、職員ということではないわけでございますので、そういうようなことは考えておりません。

それから、最後の内部留保の関係と赤字については、渡辺議員さんのお考えになっておるようなことでございます。

○一八番（渡辺軍治郎君） もう一つ伺いしますが、結局臨時職員や職員等の扱いが集金人の場合できない、だから社会保険は無理だ、そういうことですが、せめて社会保険に入れないというようない、そういう恵まれていない雇い人という形になって、せめてそれではバイクの半額負担とか、ガソリン代の半分をもつてやるとか、当然これは全部集金に使われるものでなしに私用もあるわけですから、そういうものも考えて、あれは軽のバイクだと思ふんですが、価格にすれば相当高いもんじゃなと思うんですが、それくらいの援助はしてやったらいいんじゃないか。

検討事項としてということですから、この分はできるだけそういうような人たちの——集金というのは大変だと思ふんですよ。

私は赤旗の集金をやっていますが、一回で済まないんですよ。三回も四回も行かないと集金できないということ、かなりぐるぐる回るわけですよ。そういう点を考えてやって、応分の援助をひとつしてやるように御検討願いたいと思うんですが、市長さんはそういう点どのようにお考えになりますか。

○市長（半沢良一君） 先ほど衛生課長答弁いたしましたように、

委託でございますので、どうもそこまでみるということとはどうかと考えます。むしろ、委託料の高の問題ということで御議論があるならば別問題でございますけれども、そういう考えはしないほうがよろしかろうと考えております。

○一八番（渡辺軍治郎君） 市長の考えだと、委託だからそういう援助とか補助とかというよりも雇用関係の給与として考えたほうが妥当じゃないかということなんです、いづれにしろそういうようなことで、集金している者の苦労をある程度いたわってやると思いますか、そういうような方向で検討してもらいたいということを要望しておきます。

○議長（吉田勇治郎君） 他に御質疑ございませんか。——御質疑がなければ次に進みます。

議案の上程

○議長（吉田勇治郎君） 日程第四、議案第四十三号館山市市税条例の一部を改正する条例の専決処分についてを議題といたします。

議案第四十三号 館山市市税条例の一部を改正する条例の専決処分の承認について

質疑 応答

○議長（吉田勇治郎君） 御質疑を願います。

○一八番（渡辺軍治郎君） 館山市市税条例の一部を改正する条例ですが、三月の議会では不均等課税で一千万以上の法人に対しては四・四％ですか、課税率を引き上げたわけです。

この提案されている条例の第三十一条二項の表中の中に、これは法人の均等割りなんですよー収益があればということでの前の不均等課税の税率の引き上げについて賛成したわけですが、この均等課税ということになりますと、一億円以上の資本金をもっているものは二万四千円から八万円までということでは、これは非常に高額な事業資金で事業をやっているわけですからそういうところは内部保留も多いだろうし、そういうことでこの均等割りを引き上げるということでは、矛盾はないわけですが、一千万円を超えて一億円という範囲が一千万ぐらいの資本金のところは、いま中小企業が五月は千七百件が倒産するというような不況とやはりインフレの中で、経営が困難になっているわけです。そういうところでは赤字になっても二万四千円の税金を納めなければならぬ。

それから、一千万円以下では七千二百円、これを八千円に改めるということですが、七千二百円だってー小さな業者です。零細業者、法人でも本当に小さい業者が赤字になって利益がないのに七千二百円。この前二千四百円から七千二百円に大幅に上げたわけですよ。今回八千円にしたということは、八百円ぐらいの値上げですから値上げの額とすれば少ないと思うんですが、しかし小さな法人で赤字経営で八千円も税金を納めなければいけないということとは、均等割り課税としては重い課税ではないかというふうに考えますが、この点はこういうふうにお考えになっているのか。

○税務課長（斉藤武男君） お答え申し上げます。

地方税法の改正によりましてこういうような結果になったわけ

でございますけれども、法人の住民税の均等割りの税率は四十二年以来据え置かれてきたわけでございますけれども、昨年五十一年度でそのように値上ったわけでございますが、一般の関係につきましてもやはり昨年四百円から千二百円に上げられたわけでございます。大体三倍ということでございますが、五十一年度に行われました税率の引き上げ幅は経済等の推移にかんがみまして十分ではなかったというようなことから、今回さらにこのように改正いたしましたわけでございます。

○一八番（渡辺軍治郎君） 私が聞きましたのは、均等課税として小さい法人には重過ぎる課税ではないかというふうに聞いたんですよ。

○税務課長（斉藤武男君） お気持ちは十分わかるんですが、けれども、地方税法の改正に従って、それに準じて行っておるわけでございますので、ひとつよろしく御理解いただきたいと思っております。

○八番（松下正己君） 四十三号について三点ばかりお聞きしたいと思っております。

第三十二条の削除、この削除はどうして廃止しなければならなかったのかということをごまかく説明してもらいたいと思います。それから、附則十八条中の排気ガス規制適合車は現在何台ぐらいあるか。

それから、附則第二条第二項の法人市民税の均等割りについて五十二年度並びに五十三年度の税収の伸びのいかん。この点をお願いいたします。

○税務課長（斉藤武男君） この三十二条の関係は、個人の均等割

りの軽減の関係でございます。地方税法の三百十一条を受けまして条例を定めることによりまして個人の均等割りの軽減を定めておるわけでございますが、この条項に該当する人は納税義務者の扶養者の中に均等割りの納税義務を負う者がいる場合でございます。その場合に一人について三十円を減額しようというものでございます。

でございますから、具体的に申し上げますと、均等割りーいま千二百円でございますけれども、扶養者の中に均等割りの納税義務者がいた場合には、一人について三十円、五人以内百五十円を減額しよう、そういうものでございます。

排気ガスの規制車の関係につきましては、現在九十一台でございます。

次の御質問は第二条の、附則の関係でございますか。

第二十四条の一項三号の関係については、これは非課税の関係をおうたっております。七十万から八十万ということでございます。

〇八番（松下正己君） 附則第二条第二項の法人市民税の均等割りについて、五十二年度並びに五十三年度の税収の伸びのいかんです。

〇税務課長（斉藤武男君） 五十三年度はこれからのことでございますから……。

〇八番（松下正己君） 大体五十二年度これくらい上がるから、五十三年はこういうふうによくなっていくだろうとか、そこらあたりを聞きたいと思って言ったわけなんですけれども……。

〇税務課長（斉藤武男君） 今回の改正によりまして、本年度は大体二百二十万ぐらいの増収が見込まれる予定になっております。

〇八番（松下正己君） 了解いたしました。

〇議長（吉田勇治郎君） 他に御質疑ありませんか。ー御質疑なしと認めます。

委員会付託の省略

〇議長（吉田勇治郎君） お諮りいたします。

本案を委員会付託を省略したいと思ひます。これに御異議ありませんか。

（「異議なし」と呼ぶ者あり）

〇議長（吉田勇治郎君） 御異議なしと認めます。よって省略することに決しました。

討 論

〇議長（吉田勇治郎君） 討論に入ります。

〇一八番（渡辺軍治郎君） 先ほど質疑の中でも明らかにしたわけですが、この三十一条二項の法人の均等割りについての改正ですが、これは地方税法で決まったといつても、やはり一億円以上のそういう大企業については、二万四千円を八万円に引き上げるといふのは妥当だと思ふんです。しかし一千万円から一億円という、一千万円のものもあれば九千万円のものもあるということとこの間には一千万といつても、これは小さな、中小企業に該当するものが相当入ると思ふんです。

ランクを一千万円以下として、一千万円以下の資本金をもっている中よりも小の法人だと思ふんです。そういうところに、赤字決算でも、均等割りとすれば二万四千円ないし七千二百円の税金

を納めるということは、いまのような不況の中で苦しんでいる業者に対して過酷な税金になるということで、私は市税条例の一部を改正する条例については賛成するわけにいきません。反対いたします。

○議長（吉田勇治郎君） 他に討論ございませんか。——討論なしと認めます。

採 決

○議長（吉田勇治郎君） 採決いたします。

本案の採決は起立により行います。

本案を承認することに賛成の諸君の起立を求めます。

（賛成者起立）

○議長（吉田勇治郎君） 起立多数であります。よって本案は承認することに決しました。

報告第二号に対する質疑応答

○議長（吉田勇治郎君） 一八番さんの質問に対して保留中の答弁を……。

○市長公室長（小倉澄男君） ただいまの一八番議員の御質問についてお答えいたしますが、まことに申しわけございませんでしたが、ミスプリントが、印刷が漏れておりまして、この二ページの当期末有高に当期取得高をそのままの同額をここに記載していただくということをお願いしたいと存じます。

それから、雑収入の内訳でございますが、十二万四千四百五十円のほうは先ほど申し上げましたように五千分の一の地図の売り

上げ高でございます。

二番目の固定資産税相当分ということは、分譲した土地の登記前の固定資産税をそれぞれ土地購入者から徴収いたして、いわゆる預りまして、これを払うわけでございますが、そのために一応雑入という形で計上された金額でございます。

その他は、ミンクの販売の保証金に対して利子が四千二百円の数字でございます。

それから、第三点の貸倒引当金の、それからさらに補修工事引当金の関係でございますが、これはあくまでも会計処理上引当金は特別損失として計上して、しかし引当金が処理されなかった場合は、前期の引当金はその前に戻し入れをするんだということで、六番目のところに特別利益として前期の貸倒引当金を千百一十六千八百五十四円ですか、それから補修工事の引当金の残九十七万八千二百九十五円、これは戻し入れておりますので、あくまでも引当金として充てたものは損失なんだ、それから残ったものは利益として入れるんだということで、当期の純損失千三十四万一千八百六十二円に間違いはないというふうに理解をいたしております。

○一八番（渡辺軍治郎君） 私が聞きしたのは、帳簿上利益が出た場合には課税を少なくするためにも引当金として法で決まった額は繰り入れ、繰り戻しのことを認めているわけですか。だから利益金の中から損失として引当金を挙げるわけですから、だから引当金は取りくずさなければ結局はまた繰り戻すということになるわけです。ですから実質的にはこれに損失として千三十四万一千八百六十二円あげているけれども、内部保留されたものからみれば一千九十七万一千九百九十五円とそういう内部保留があるから

実質的には損失にならないんじゃないか。

したがって、利益金処分をこれは千六百五十万四千四百四十五円というふうに利益金を計上していますが、これは結局二千六百八十四万六千七百円が実質的な利益剰余金。要するに引当金を繰り戻したと見れば、これは当然また繰り入れがあるかもしれないけれども、利益から損金として落したわけですから、だから実質的には二千六百八十四万六千七百円が剰余金として次期へ繰り越しされる、実質的には損金で落しているから、千三十四万一千八百六十二円というのは内部保留しているわけですから、そういうことで質問したわけですから、何か利益が少なく見えるような、この報告で見れば、そういう損金におとしているから、この分だけ利益が少なく見えるように数字の上では見えるわけです。実質的にはそうではないということをお尋ねしたわけです。

〇二九番（望月照正君）　ただいま渡辺議員のいろいろ質問の中で、これはやはり小倉課長さん直してもらわなきゃならないと思うんですが、ただいまの受託工事原価の記載の問題ですが、これは市民センター冷房工事だと思んですが、市役所のほうに、館山市に幾らで売却したんですか。

〇市長公室長（小倉澄男君）　公社のほうといたしましては工事費が六千三百万、そしてその利息といたしまして三百七十四万五千六百九十一円、計六千六百七十四万五千六百九十一円という受託工事に関する総額を決定いたしております。

〇二九番（望月照正君）　そうしますと、これは原価そっくりを館山市に立てかえ工事しているようなことですね。そうしますとこの記載が当期末有高でゼロで一番いいんです。なぜならば、もし

これが原価をさっき課長がおっしゃるようにミスプリントであるとするならば、この売り上げの中のどこの欄に六千六百七十四万五千六百九十一円が載っていますか、これをちょっとお聞きしたいんですが……。

〇市長公室長（小倉澄男君）　これは実は売上原価の計上いたしました、損益計算書の計上するものは、売り上げに対して原価はこれだけだったという額を計上すればよろしいということでございますので、その説明といたしまして前期末にこれだけの原価の有高があって、取得が幾らあって、それに対して今期に売り上げたものの原価が、一では受託土地売上原価で申しますならば七百四十五万四千六百三円の原価で、そして当期末に有る土地の原価として一億二千百九十九万九千五百二十六円あるということで、私たち記載をいたしましたために、このバランスから申し上げますというところと六番の受託工事原価もやはり前期にはなかったということですが、当期の取得に六千六百万あったのですが、実際の冷房工事の売り上げはなかったわけでございますので、売上原価はなかったでそのまま当期に取得した有高がそのまま当期の欄に有高として残っているということで、前のほうのバランスから考えて落としたということはまことに申しわけありません。訂正させていただきます。

〇二九番（望月照正君）　それは市役所の立てかえ工事だから工事売り上げというのはここに載せないのは承知して載せない、ですからあくまでも第六は別にしておけばよかったんですけれども、そのために受託工事原価というものがどこにいつているかということと振りがえて資産の部に入っている。だから市役所から当然この

金をもらうべきだ。これが課長さんがおっしゃるようにするならば受託工事売上ということで同額で六千六百七十四万五千六百九十一円を載せればこれはこれでかまわないわけです。これを載せないで資産のほうに載せたからおかしな問題が出てくる。

先ほどの渡辺議員の質問といまの質問と全く逆のことになっていきますけれども、だからこれはどうしたら一番いいかということ、受託工事原価というのは別欄にしておけば一番いいんで、そうすれば市役所から当然利益なしで当期取得高が開発公社に返ってくれば自然に消えちゃうんですから、そういうふうな方法で決算書をつくるべきじゃないですか。そうでないとバランスが合わないと思うんです。ちょっとお聞かせいただきたい。

○市長公室長（小倉澄男君） ただいまの御意見よく今後検討いたしまして、こういう場合のいわゆるバランスシート、それから損益計算書の作成について、今後善処していきたいと思えます。

よろしく願います。

○一五番（辻田 実君） 質問ということよりも、先ほどの答弁の中において、印刷の誤りにおいて挿入してもらいたいということでございますけれども、これは印刷の誤りなのか、説明不足だったのか明らかにしてもらいたい。

少なくとも議案として報告案件が出されているものについて、誤りのものを提出されて承認を願いたいということについては非常に問題があるわけでございまして、この点については先ほどの御答弁が誤りなのか、答弁でもって挿入さして報告事項をこれで了承をとるといふ、そういう姿勢なのか。

議会の議案提案についての重大な問題であるわけですから、不

備な議案の提案というふうに受けとめられるわけでございますけれども、その点について報告書ですから微に入り細に入り報告でなくて、説明でもってかわるべきものがあつたと思えますけれども、言葉の中に、そういうような言葉がありましたので、この点については印刷を直して、改めてきちんとした報告書を出してもらえるのかどうか。そうでないと、不備な報告書そのまま承認云々ということについては非常にわれわれとしても困るわけでございますから、そのへんの見解もう一度明らかにしていただきたいと思えます。

○市長公室長（小倉澄男君） まことに申しわけありませんが、ミズプリントでございましたので、これを訂正させていただきますというところでございます。

○議長（吉田勇治郎君） 本件はこれで終らしていただきたいと思えます。先に進みましたので……。そういう関係でひとつよくなるための御意見はいずれまた御発言できると思いますので、お願いいたします。

議案の上程

○議長（吉田勇治郎君） 次、日程第五、議案第四十四号館山市国民健康保険税条例の一部を改正する条例の専決処分の承認についてを議題といたします。

議案第四十四号 館山市国民健康保険税条例の一部を改正する条例の専決処分の承認について

○議長（吉田勇治郎君） 御質疑を願います。御質疑ございませんか。——御質疑なしと認めます。

委員会付託の省略

○議長（吉田勇治郎君） お諮りいたします。

本案を委員会付託並びに討論を省略して、採決することに御異議ございませんか。

（「異議なし」と呼ぶ者あり）

○議長（吉田勇治郎君） 御異議なしと認めます。

採 決

○議長（吉田勇治郎君） 採決いたします。

本案を承認することに御異議ございませんか。

（「異議なし」と呼ぶ者あり）

○議長（吉田勇治郎君） 御異議なしと認めます。よって本案は承認することに決しました。

議案の上程

○議長（吉田勇治郎君） 日程第六、議案第四十五号昭和五十一年度館山市一般会計補正予算の専決処分の承認についてを議題といたします。

議案第四十五号 昭和五十一年度館山市一般会計補正予算（第四号）の専決処分の承認について

質 疑 応 答

○議長（吉田勇治郎君） 御質疑願います。
○一五番（辻田 実君） 先般の説明で私が聞き漏らしたというん

ですか、正確にできなかったんですけれども、この決定があったのが議会終了後何日ということについて、日づけがちょっとわからなかったんですけれども、もう一度何日に決定があったんですか、その日にちを明確にしたいと思っています。

○財政課長（山田俊康君） 五十二年三月三十一日の午後、しかも夕刻、たしか四時前後だったかと思っています。夕刻近くになって県より二次分の配分があった。時間的には夕方ということでございます。

○一五番（辻田 実君） その日時ですと三月の議会が終了したわけでございますけれども、この種の問題については、二次分の追加でございますから、多少問題はないかもわかりませんけれども、ある程度——しかし専決処分について、税金関係等、国会関係に關するもの等はやむを得ないにしても、専決処分については自治法の百七十九条に非常に厳しい制限があるわけでございまして、できるだけこれは早急に処理しなきゃならないとしてあるわけでございます。

特に、専決処分については、市長の裁量によって決定すべきであるが、長の認定には客観性がなければならぬということでもって、三月三十一日から今日まで四、五と六月、二カ月有余になるけれども、こうした問題についてはもう少し何らかの形で処理する方法はなかったのかどうか。

客観性についてのは、三月議会の末で、三十一日夕方になつてしまつたのでというだけで客観的な条件の説明になるのかどうなのか、専決処分については非常に幅が広いので一概に言えませんけれども、しかしいままで館山市においては前の市長以来

専決処分については慎重を期してもらいたいということは再三議会でやられてきているわけでございますので、そのへんについてこの扱いについてどのような考えをもっておるのか。客観性との関係について御説明をいただきたいと思ひます。

○財政課長（山田俊康君） この問題につきましては、三月の定例議会前の全員協議会にもお諮りいたしましたように、本年度は特に北陸地方の豪雪地帯がありまして、豪雪関係に起債関係が重点的のもつていかれそうて、二次分の配分が大変遅れる予定でございます。遅れてもなおかつ配分があつた場合には、議会終了後であつた場合にあらかじめ御了承を得たいということで御説明を申し上げて、その結果最終的には年度末ぎりぎりの、しかも時間的にもぎりぎりの四時近くになつてしまつたという事実でございます。御了承いただきたいと思ひます。

○一五番（辻田 実君） その点についてはぎりぎりということで若干追加云々ということもあり得るということだつたんですけれども、議会を開かないにしても、これについて執行云々ということよりも多少何らかの形で——新聞等には若干そういうようなことでもつて云々ということが報道されておりましたけれども、通知とか、そういうよりなかつたので、二次分決定があつた位の伝達、全員協議会、議会を開かなくてもそういうような措置等をとれたんではないかという感じもするんですが、そういうことはできないものかどうか。

何かほかの新聞、そういうものではわかつておつても、実際正式云々ということがなくて、今日に至つて二カ月有余たつて、ここに初めて、議案として専決処分という形の中でもつて出てくる

ということについては、今後の問題もありますので、この点についてはどうなのか。

○市長（半沢良一君） 御意見ももっともでございますけれども、この件に關しましては先ほど財政課長からお話し申し上げましたとおり、全員協議会で御了承いただきましたし、その金額についても大體の見当を御説明申し上げてございましたので、その必要はなからうかと感じたわけでございますので、それで今回のような措置にいたしましたわけでございます。

○議長（吉田勇治郎君） 他に御質疑ございませんか。——御質疑なしと認めます。

委員会付託の省略

○議長（吉田勇治郎君） お諮りいたします。

本案を委員会付託並びに討論を省略して採決することに御異議ございませんか。

（「異議なし」と呼ぶ者あり）

○議長（吉田勇治郎君） 御異議なしと認めます。

採 決

○議長（吉田勇治郎君） 採決いたします。

本案を承認することに御異議ございませんか。

（「異議なし」と呼ぶ者あり）

○議長（吉田勇治郎君） 御異議なしと認めます。よつて本案は承認することに決しました。

議案の上程

○議長（吉田勇治郎君） 日程第七、議案第四十六号館山市長、助役、収入役の給与及び旅費に関する条例の一部を改正する条例の制定についてを議題といたします。

議案第四十六号 館山市長、助役、収入役の給与及び旅費に関する条例の一部を改正する条例の制定について

質 疑 応 答

○議長（吉田勇治郎君） 御質疑を願います。

○一八番（渡辺軍治郎君） 市長、助役、収入役の給料の値上げの条例ですが、五十一年から五十二年にかけて使用料、手数料—五十二年の三月予算ではくみ取り手数料から家賃の値上げ、それから保育料の値上げというように公共料金を一斉に引き上げて不況とインフレの中で生活に困っている。そういう市民に対しては相当大きな負担を、いわゆるがまんを強いているわけです。

市の財政事情が赤字で困るから市民ががまんしろというように公共料金の値上げによって市民にがまんを押しつけている中で、市長、助役、収入役の給料——これは自分たちのふところへ入金です。そういうのはさっさと上げることについて、市民との関係で矛盾を感じていないのかどうか。その点をお聞きしたいと思います。

○市長（半沢良一君） さっさと上げたわけではございません。

（笑聲） 四十九年の十月以来二年半にわたって、われわれも押さえてきたわけでございます。

○一八番（渡辺軍治郎君） さっさと上げているという、そういう

あれは別にしても、市民にはがまんを強いているわけです。だから、この際自分たちも少しがまんしようというような考えがあつてしかるべきじゃないかというような観点から質問したわけで、そういう点ではおそらく矛盾を感じながらも何とかこういう値上げを出してきたのではないかと思います。その点をお聞きしたわけですよ。矛盾はないんですか。

○市長（半沢良一君） まあ二年半がまんしてまいりましたから、——どうも矛盾を感じないかという心境を聞かれますと、大変困るんですが……。お察しをいただきたいと思ひます。

○議長（吉田勇治郎君） 他に御質疑ございませんか。——御質疑なしと認めます。

委員会付託の省略

○議長（吉田勇治郎君） お諮りいたします。

本案を委員会付託を省略することに御異議ございませんか。

（「異議なし」と呼ぶ者あり）

○議長（吉田勇治郎君） 御異議なしと認めます。

討 論

○議長（吉田勇治郎君） 討論に入ります。

○一八番（渡辺軍治郎君） ただいま質疑の中で言ったんですが、私はこの給料の値上げには反対なんです。なぜ反対かと言え、ただいま申し上げましたように使用料、手数料、そういうような公共料金の引き上げをこれは五十一年度から五十二年にかけてずっとやっているんです。

これは、それぞれの使用料、手数料にしては、額とすればそう大きな額ではないかもしれませんが、いろんな額が全部集まるわけでですから、そういうことでは不況とインフレの中で生活が圧迫されている中では大きな負担を市民に強いる。したがって、市民にはがまんしてもらいたい。しかし、そういう中ではやはり市のほうも給料の値上げはがまんしなければいけないんじゃないかと——状況の中で言っているわけですよ。市民に負担を転嫁させているような、そういうことがない場合と、現在のようにやっけてきているそういうことの中で、こういうふうに一方では市民に負担を、一方では給料の値上げをするというようなことは、そういう観点から見ればどうしても賛成するわけにいかないわけです。したがって、議案第四十六号の市長、助役、収入役の給与の引き上げについては反対いたします。——討論なしと認めます。

採 決

○議長（吉田勇治郎君） 採決いたします。

本案の採決は起立により行います。

本案を原案どおり可決するに賛成の諸君の起立を求めます。

（賛成者起立）

○議長（吉田勇治郎君） 起立多数であります。よって本案は原案どおり可決されました。

議 案 の 上 程

○議長（吉田勇治郎君） 日程第八、議案第四十七号非常勤の特別職の職員に係る報酬及び費用弁償に関する条例の一部を改正する条例の制定についてを議題といたします。

議案第四十七号 非常勤の特別職の職員に係る報酬及び費用弁償に関する条例の一部を改正する条例の制定

について

質 疑 応 答

○議長（吉田勇治郎君） 御質疑を願います。

○一八番（渡辺軍治郎君） 市長、助役、収入役の給料の引き上げに反対したわけですが、議員の報酬についても、私は議会でずっとその中で一貫して公共料金——いわゆる使用料、手数料の公共料金を引き上げすることは、いまのような不況とインフレの中でこれは市民に対して生活を圧迫するものだというふうに主張してきましたわけですよ。これはやっぱりさっき言ったように市民に対してがまんを押しつけるということ、私は議員の場合もそういう点ではがまんをすべきではないか。

この内容そのものは、私はいまのような物価高の中で、いままでの十三万円というのは低い額ではないかということとは認めるわけですよ。一般の給料との比較でも、県下の同じ程度の議会の議員の給料とすれば、やはり最低の部に属しているというふうに見ていきますから、そのものについてはやはり状況から見て引き上げなければいけないのではないかというふうな考えは一応持っているわけです。

しかし、先ほど申し上げましたように、使用料、手数料を次々

に上げて市民生活を圧迫している中で、やはり給料を上げるということでは市民感情から見て問題があるろうということで、そういう点をどのようにお考えになるのか。そこらをもひとつお聞きしたいと思います。

○市長（半沢良一君） 前号の議案でも申し上げましたとおり、二年半にわたりました議員の報酬を上げてこなかったわけでございます。と申しますのは、やはりただいま渡辺議員が御指摘のような事情のもとでがまんをしていたのだ——二年半にわたってがまんをしていたのだいたわけでございます。しかしがまんをしていただくのにもそれぞれ限度があるろうかと思ひまして、そして諸般の状況を考えまして報酬審議会にかけたわけでございます。

報酬審議会の答申もいただきましたので、議案として提出をいたした次第でございます。

○議長（吉田勇治郎君） 他に御質疑ございませんか。——御質疑なしと認めます。

委員会付託の省略

○議長（吉田勇治郎君） お諮りいたします。

本案を委員会付託を省略いたしたいと思ひます。これに御異議ございませんか。

（「異議なし」と呼ぶ者あり）

○議長（吉田勇治郎君） 御異議なしと認めます。

討 論

○議長（吉田勇治郎君） 討論に入ります。

○一八番（渡辺軍治郎君） 私は議員の報酬の引き上げについて反対する討論をしたいと思ひます。

反対の理由は、市長がただいま質疑の中で言われたように、市民にがまんを強いると同時に議員にもがまんを強いてきたというよりなことを言われておりますが、確かに質疑の中で言ったようにいまの物価から見れば十三万というような議員の給料はこれ以上上げていいのではないかというような、そういうあれももっているわけです。

それから、物価だけじゃなしに、県下の市の議員の報酬をずっと見ますと最低のランクになっていきますから、そういう点から見てもある程度考える必要があるんじゃないかというふうに見ております。

しかし、市の行政が使用料、手数料というような公共料金を引き上げて市民に負担を強いているというような状況の中では、市民感情から見て、市長、助役、収入役、それから議員も一斉に報酬を上げると、しかも四月までさかのぼってというような形になっていきますので、市民感情からみれば当然そういう批判を受けるんではないか。市民に負担を転嫁しながら報酬というようなものを引き上げる。時期的な問題もそういうような中で相当やっぱり考えなければならぬ問題ではないかというふうに考えて、反対いたすわけでございます。

○議長（吉田勇治郎君） 他に討論ございませんか。——討論なしと認めます。

採 決

○議長（吉田勇治郎君） 採決いたします。

本案の採決は起立により行います。

本案を原案どおり可決するに賛成の諸君の起立を求めます。

（賛成者起立）

○議長（吉田勇治郎君） 起立多数であります。よって本案は原案どおり可決されました。

議案の上程

○議長（吉田勇治郎君） 日程第九、議案第四十八号館山市教育長の諸給与及び勤務条件等に関する条例の一部を改正する条例の制定についてを議題といたします。

議案第四十八号 館山市教育長の諸給与及び勤務条件等に関する条例の一部を改正する条例の制定について

質疑応答

○議長（吉田勇治郎君） 御質疑を願います。

○一八番（渡辺軍治郎君） これは前の給料の、報酬の引き上げと同じような立場ですから、一応そういう関係と同じなんで、質疑は前と同じということ……（笑声）

○議長（吉田勇治郎君） 他に御質疑ございませんか。——御質疑なしと認めます。

委員会付託の省略

○議長（吉田勇治郎君） お諮りいたします。

本案を委員会付託を承略いたしたいと思ひます。これに御異議

ございませんか。

（「異議なし」と呼ぶ者あり）

○議長（吉田勇治郎君） 御異議なしと認めます。

討論

○議長（吉田勇治郎君） 討論に入ります。

○一八番（渡辺軍治郎君） 議案第四十八号に反対の討論を行います。反対の理由としては、市長、助役、収入役の値上げに反対したと同じ理由でございます。

市民に負担を転嫁しながら、やはり給料の値上げをするというようなことは、市民感情のそういう立場からみても妥当ではないというふうに考えて、反対いたします。

○議長（吉田勇治郎君） 他に討論ございませんか。——討論なしと認めます。

採決

○議長（吉田勇治郎君） 採決をいたします。

本案の採決は起立により行います。

本案を原案どおり可決するに賛成の諸君の起立を求めます。

（賛成者起立）

○議長（吉田勇治郎君） 起立多数であります。よって本案は原案どおり可決されました。

議案の上程

○議長（吉田勇治郎君） 日程第十、議案第四十九号館山市学校安

全共済掛金徴収条例の一部を改正する条例の制定についてを議題といたします。

議案第四十九号 館山市学校安全共済掛金徴収条例の一部を改正する条例の制定について

質 疑 応 答

○議長（吉田勇治郎君） 御質疑を願います。

○一八番（渡辺軍治郎君） 安全協会の掛金の徴収条例ですが、共済条例では一人百円、市が五十円、こういう形で百五十円で学校共済が行われているわけです。ところがこの共済金徴収条例のほうでは九十円を百五十円にするということで、そこらを実際にやっている共済掛金とそれから実施している共済条例では百円、五十円とそこに違いがあるわけです。

これは定款でもって掛金は決めなければいけないというような説明があったわけですが、定款に基づいて決めるんだと、九十円を百五十円にするという掛金と、実際に現在五十二年度予算で出されていますが、その中では一人百五十円になっているんですよ、なぜこのように掛金条例を九十円を百五十円にするというふうに改めなければならぬのかどうか、そこがわからないので御説明願いたいと思います。

○学務体育課長（黒川邦保君） いまの御質問ですが、館山市学校安全共済掛金条例と館山市学童災害共済条例の二つがお話の中にかがわれますが、共済掛金の場合には九十円を百五十円にし、災害共済条例の場合は現状のまま児童、生徒からは百円集めるということになっております。

○一八番（渡辺軍治郎君） 何かちょっとわからないんですが、掛金の徴収条例でしよう、掛金というのは共済制度をやっていくために個人の負担を決めるわけです。ところが実際に予算を組んで実施している共済のほうでは百円と五十円なんです。市が五十円本人百円なんです。なぜそういうようなことで運営されているのに改めて掛金を引き上げなければいけないか。六六％引き上げなんです。

この問題は、やっぱり私が不審に思うのは、この前幼稚園の保育料の条例を決めるときに、三分の一の国の補助金を多くもらうためにということで、二千五百円に保育料条例の負担金を決められてます。そのときには無料でしたから、実際は無料でありながら国の補助金を増すために二千五百円の条例を決めて、今度は条例どおりということで保育料を二千五百円に引き上げたわけでしょう。そういうものと関連して掛金の徴収条例を九十円から百五十円に上げて、これは六六％の値上げになるわけです。今度は共済条例のほうでは百円、五十円と決まっているやつが、また自動的に引き上げられていくんじゃないかという心配もあるんで、お伺いしているわけなんです。

○庶務施設課長（汐崎政光君） ただいまの渡辺議員さんの御質問の一つの中には館山市学童災害共済掛金、これがあると思うんでございます。これは市が単独で設定して、児童に災害のありました場合、市で見舞金を出すような形で設けたものでございます。

それから、今回条例改正をお願いしております館山市学校安全共済掛金徴収条例、これは日本学校安全会法によりまして、全国的な組織の中で、学校の管理下で児童が災害を受けました場合に

それに対する補償制度として発足しているものでございます。

ですから、市が単独で独自に設定いたしました学童災害共済、

このほうの掛金は変わりはないわけでございますけれども、今回条例の一部改正をお願いしておりますのは、その全国的な学童の補償制度のほうのものでございまして、これは二つはまるっきり別個のものでございます。

〇一八番（渡辺軍治郎君） 別個のものといえますと、一条中の九十円を百五十円というのは、学童共済のほかに全国的なものとして一人百五十円というのが保護者の負担になるわけですか。かなり上げ幅として六六%という大きいわけです。

〇庶務施設課長（汐崎政光君） ちょっと記憶に間違いがあるかもしれませんが、今回お願いしております共済掛金の父兄からの徴収額は、たしか三年ばかり据え置かれて、今回法に基づいて定款の改正がなされたものだと思っております。

〇一八番（渡辺軍治郎君） これには、市の単独の共済事業に対しては市は五十円負担しているんですけども、全国的なものについては市は負担しないんですか。

〇庶務施設課長（汐崎政光君） 今回の徴収額は総体掛金の半分でございまして、同額のを市が負担するようになっております。それは法で決められております。

〇一六番（安西益男君） 一点だけ伺いたします。

学童共済制度、これは御承知のように私どもが提案して実現させていただいたわけでございますが、これはすぐ支給をするわけですけれども、安全会の場合ですと、児童がけがしても、入院しても、金がなかなかこない。その間非常に困る。そういったこと

で、その期間はどのくらい——申請してから支給額がくるか。その点ちょっとお聞かせいただきたい。

〇学務体育課長（黒川邦保君） 事務の状況によっても違いますが、三カ月後程度に支給されると現場で考えております。

〇一六番（安西益男君） それはより短縮してするということは技術的にむずかしいんですか。

少額の場合はいいんですけども、入院費の場合はそのほかに払わなければいけないという事態が出てくると思うんです。けがの場合も大きなけがの場合は、過去にそういった例があって大変困ったと聞いているが、どうしても期間は三カ月かかるんですか。

〇学務体育課長（黒川邦保君） すぐにまとめればいいんですが、月単位に教育委員会でもまとめて県のほうに請求するということで、まとめる事務が週単位とか十日単位でなく、月単位でやっています関係上そうなっております。

〇一六番（安西益男君） 特殊な事故の場合は、単独でその事故の申請だけするというわけには——まとまらなければやっぱりいいけないということですか。

〇学務体育課長（黒川邦保君） 三つ——医療給付の場合と、それから廃疾、死亡の場合とありますけれども、前者の場合を御質問なさっていると思いますけれども、廃疾及び死亡につきましては別途早急な道があると考えております。

〇議長（吉田勇治郎君） 他に御質疑ございませんか。——御質疑なしと認めます。

委員会付託の省略

○議長（吉田勇治郎君） お諮りいたします。

本案を委員会付託を省略したいと思ひます。これに御異議ございませんか。

（「異議なし」と呼ぶ者あり）

○議長（吉田勇治郎君） 御異議なしと認めます。

討 論

○議長（吉田勇治郎君） 討論に入ります。

○一八番（渡辺軍治郎君） 質疑の中で議案第四十号かなり明らかになつたんですが、一つ問題に思ひのは、市の事業としての学童共済が保護者一人百円で市が五十円、全国的なそういう救済に対しては市も保護者も百五十円ということですが、結局市単独の場合には事業とすれば小さいわけです。しかし全国的なそういう規模でやるとすれば、市の単独のほうよりもっと掛金は少なくないんではないか。規模が大きくなれば全国的に相当の事業になるわけです。その掛金を値上げをするという点でわからないわけです。

ですから、高くても市と同額とか、そのくらいにすればいいと思ひんですが、六六％という全国的な規模である場合かなり高い値上げになると思ひんです。これはやはり保護者に対して相互扶助的なものもあると思ひんですが、かなり高い負担になるというところで反対いたします。

○議長（吉田勇治郎君） 他に討論ございませんか。——討論なしと認めます。

採

決

○議長（吉田勇治郎君） 採決いたします。

本案に対する採決は起立により行ひます。

本案を原案どおり可決するに賛成の諸君の起立を求めます。

（賛成者起立）

○議長（吉田勇治郎君） 起立多数であります。よつて本案は原案どおり可決されました。

議 案 の 上 程

○議長（吉田勇治郎君） 日程第十一、議案第五十号館山市国民健康保険税条例の一部を改正する条例の制定についてを議題といたします。

議案第五十号 館山市国民健康保険税条例の一部を改正する条例の制定について

質 疑 応 答

○議長（吉田勇治郎君） 御質疑を願ひます。

○一八番（渡辺軍治郎君） 保険税の決算見込みが大体六月算定の時期で七千九百六十一万九千円の黒字になるというふうに説明ではあつたわけですが、その中で今年は四千四百万円ですか、これに該当するものとして大体〇・七％の増税見込みが〇・三％に下がつたというような、そういう説明を受けたわけですが、五十二年の三月の補正予算で三千八百六十六万二千円減額補正をしてゐるわけです。これは六月算定の中に入つてゐると思ひんですが、合計して七千九百六十一万九千円の黒字ということじゃないかと思ひんです。前年度では繰越残が六千六百七十万九千円あつたわ

けです。

こういう一連の数字から見ても、要するに保険税を過大に見込んでいるんじゃないか。これは保険給付に対するものですから、黒字になるということはどういう事情で黒字になったかわかりませんが、一応予算が過大に見込まれているんじゃないかという疑問があるわけです。黒字になったのはどういうわけで黒字になったのか、そのへんをひとつお聞きしておきたいと思います。

もう一つは、予算特別委員会で指摘しましたが、社会保障的な経費が七千七百万ぐらいある。これが保険税への大きな負担になっているということで、そういう社会福祉的な経費は他会計に移すべきではないか。もしそれが他会計——それが制度上移せないとなれば一般会計から繰り入れをする根拠があるということで、御検討をお願いしたんですが、その点はどのように検討されたか。二つをまずお聞きしたいと思います。

〇保健課長（吉岡政雄君） ただいまの御質問にお答えいたします。いま渡辺議員さん七千九百万とおっしゃいましたけれども、私御説明申し上げたときは、繰越残は一億九百六十一万四千円、このうちから当初予算におきまして三千万がもうすでに予算計上してありますので、七千何百万が使える額であるという御説明申し上げました。そういうわけで繰越残は一億九百万でございましたので御了解いただきたいと思います。

次の増の原因でございますが、これはいま御質問のございました保険給付費が総体に占める割合の九三％でございます。これは予算の積算方法といたしましては御承知のとおり歳出から決めていくわけでございまして、その中の保険給付費は国から示されま

したそれぞれの指数がございます。館山においても全国マクロ的な指数を使わせていただいております。つきましては二年ないし三年の伸び率をかけまして、なおそれに五十一年度にありますのは県の指示によりまして全県下一三％の医療費改定ということで予算に盛り込んでおります。幸いにも九・一％しか上昇しなかった、医療費の改定がなかったわけでございます。それに基きまして残りしましたものが約——歳出のほうの保険給付でございますが、六千万程度、これが予算未執行というものになったわけでございます。

それから、三月補正お願い申し上げてございましたけれども、あの時点におきましてはまだまだ一月ごろの患者さんのレセプトが回ってきておりませんので、一月分の実態がわかっておりません。一月、二月、三月は例年非常に医療費がかさみます。そういうところから積算いたしましたわけでございますが、現実におきましては医療費の伸びがそうなかった。大きな伸びはなかったということでございます。

かぜ、流行性感冒というようなものはやりますとすぐ診療費に響いてまいります。そういうところから積算は非常にむずかしいわけでございますが、私どものほうといたしましてはそのような基準によりました方法で県のほうに申請いたしますと補助金の申請が却下されてしまいます。これは全県下一律の方法でやっておりますので、安房郡市におきましてもすべての町村が相当高額の繰越金を出しております。こういうことでございます。

もう一点の社会福祉的なものはどうかという御質問でございますが、現行の制度の国保でもってその事業をやれば三分の一とか

二分の一とか額こそそう多くはございませんけれども、補助金がいりるわけでございます。そういう中で一般会計の方に回しますと該当外になってしまいます。そういうことでございますので、幾らかでもいただけるものはいただこう、こういうことから今後いまの方針は続けてまいりたい。このように考えております。

○議長（吉田勇治郎君） 他に御質疑ございませんか。——御質疑なしと認めます。

委員会付託の省略

○議長（吉田勇治郎君） お諮りいたします。

本案を委員会付託を省略いたしたいと思ひます。これに御異議ございませんか。

（「異議なし」と呼ぶ者あり）

○議長（吉田勇治郎君） 御異議なしと認めます。

討 論

○議長（吉田勇治郎君） 討論に入ります。

○一八番（渡辺軍治郎君） 私は議案第五十号に反対の討論ではないわけですが、条例の一部を改正する条項の三条、四条、五条、十二条というふうにあります、これについては資料がわたされましたけれども、一応〇・四％ですか、減になっているわけですから、そういう点については賛成なわけです。

しかし、はっきりさせておきたいのは、三月議会で国保税の予算に対して反対討論をしたわけですが、反対討論の内容は先ほど申し上げましたように相互扶助的な——とにかく医療費に対する

保険税というものは税金なのに社会福祉的な母子手当とか、葬祭費とか、育児手当とか、保健婦さんのそういう制度的なものとか医療とは関係のない社会福祉的なものが含まれて、それが保険税に転嫁されていっているということについては問題が非常にありますので、原則的には国保税のそういう問題については反対なわけです。原則的に。

しかし、ここに出されている条例の制定は、これは負担の問題をここに出しているわけで、その中で前年度と比べれば案分率にしても、それから課税の配分、そういうようなものからみて減額になっていきますので、そういう点では賛成したいと思ひます。したがって、議案第五十号に反対ではなくて賛成いたします。

○議長（吉田勇治郎君） 他に討論ございませんか。——討論なしと認めます。

採 決

○議長（吉田勇治郎君） 本案を原案どおり可決するに御異議ございませんか。

（「異議なし」と呼ぶ者あり）

○議長（吉田勇治郎君） 御異議なしと認めます。よって本案は原案どおり可決されました。

午前の会議はこれにて休憩とし、午後一時再開いたします。

午前十一時三十分 休 憩

午後 五時二十 分 再 開

○議長（吉田勇治郎君） 午後の出席議員数三十名、休憩前に引き続き会議を開きます。

延

会 午後五時二十分延会

○議長（吉田勇治郎君） 本日の会議はこれにて延会いたしたいと思えます。これに御異議ございませんか。

（「異議なし」と呼ぶ者あり）

○議長（吉田勇治郎君） 御異議なしと認めます。よって本日はこれにて延会することに決しました。

次会は六月十七日午前十時開会といたします。その議事は安房郡市広城市町村圏事務組合議会議員の選挙等いたします。

○本日の会議に付した事件

一、報告第一号乃至報告第三号

一、議案第四十三号乃至議案第五十号

